

◆ 巻頭言

夢を走り続ける女たち

増田 明美

今年はロンドン五輪の年。昨年のなでしこジャパンの活躍に続けと、女性たちの気迫が漲みなぎっています。これから女子マラソンも選考レースが続きますが、この冬の駅伝を見ていると粘って粘って逆転して勝つレースが多くなりました。これもW杯決勝戦で澤穂希さんがギリギリのところまで1点を入れ、PK戦に持ち込んでアメリカに勝った試合の影響が大きいと思います。「最後まで諦めなければ何が起こるかわからない」ことを競技を通して教えてくれました。

女性の陸上選手を取材して気づくのは、男性以上に本番の試合を「自分の舞台」と捉えて臨む選手が多いことです。大会前の記者会見で目標を質問されると、男性は「結果」を話す人が多いのですが、まさに大会を「戦場」と捉えているのでしょうか。それに比べて女性はあまり具体的な結果を言わず、「私らしいレースをしたい」と内容にこだわり、観られることを意識します。男女共に日々の練習はすごく地味。最近は酸素の薄い高地での練習が主流で、選手はよく中国の雲南省昆明で一ヵ月くらい合宿をします。広い田園風景を眺めながら40キロ走など行う中、沿道に人はなく、たまに水牛やアヒルが田んぼの中から応援してくれます。孤独で修行僧のような鍛錬の毎日ですが、だからこそ華やかな舞台で女性は輝くことを楽しみに出来るのだと思います。

スポーツは世界的に見て、アフリカなどの途上国がまだまだ本腰を入れていない競技もあり、女性のほうがメダルを獲る可能性が高いと言われています。文部科学省でも2012(平成24)年度のナショナル競技力向上プロジェクトとして、女性アスリートの戦略的強化を明文化しました。競技を続ける上で課題となる妊娠、出産、育児などについても支援していこうというもので、素晴らしい動きだと思います。女子マラソンの場合、2008年の北京五輪で金、銀メダリストは共にママさんランナーでした。国の女性アスリート支援は、ますます女性たちを、さらに日本全体を元気にすると思います。



PROFILE

増田 明美
(ますだ あけみ)

スポーツジャーナリスト。高校在学中、長距離種目で次々に日本記録を樹立。1984年のロス五輪に出場。92年に引退するまでの13年間に日本最高記録12回、世界最高記録2回更新という記録を残す。2001年から10年間、文部科学省中央教育審議会委員を務める。現在はスポーツジャーナリストとして活躍中。大阪芸術大学教授、厚生労働省健康大使。